

# サッカーのフォワード選手における得点者のプレー過程

芹生 和樹 (競技スポーツ学科 コーチングコース)  
指導教員 山田 庸

キーワード：シュート、プレーエリア、スプリント

## 1. 緒言

現代サッカーでは、守備戦術の発展により得点を取ることも難しくなっている。守備陣形が非常にコンパクトになり守備的選手がゴール前に密集していることが多いためである。しかし各チームで注目されている選手は、研究されマークが厳しくなり得点をあげるのが難しくなる中でも、得点をたくさん重ねている。

Jリーグ得点ランキング上位のほとんどはフォワード選手が占めている。フォワード選手はゴールまでのプレーの数手前からゴールから逆算したプレー選択を判断し実行しているとされている。このようなプレーの選択実行過程における具体的な特徴を詳細に調査し、その違いや共通点を明らかにすることにより、組織的な攻撃における得点が生まれるポイントが明確になると考えられる。

加藤 (2015) はサイドミッドフィルダー2名のプレー軌跡を明確に記述しその共通点と相違点を検証した。しかし、フォワード選手についてこのような視点をもつ研究は見られない。

そこで本研究では、Jリーグ所属選手を対象に、得点に至るまでに行われたプレーを調査しその特徴を明らかにし、得点が生まれるポイントを検証する事を目的とした。

## 2. 研究方法

調査対象者は、Jリーグ得点ランキング上位に位置しそれぞれタイプの異なる大久保嘉人、小林悠 (ともに川崎フロンターレ所属) とした。対象試合は、2016J1 リーグ 1st 第 12 節、2016J1 リーグ 2nd 第 14 節から第 17 節までの川崎フロンターレ戦の計 5 試合とした。公式映像を観察し、フォワード選手の得点までの動きから、ボールを受けた位置およびドリブル、パス、シュートの位置と方向を記録した。測定誤差を最小化するためにピッチの縮尺図を用いて記録した。プレーの軌跡が描

かれた縮尺図を観察し、動画と照らし合わせプレーの質的分析を行った。

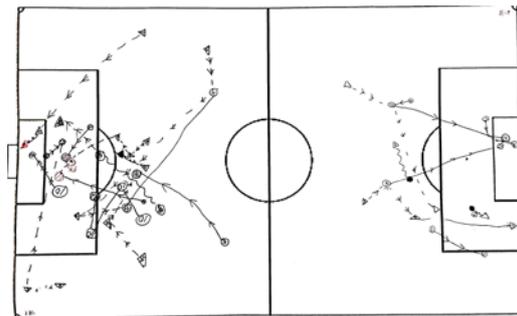


図1 大久保選手 (川崎 F) のプレー過程

## 3. 結果および考察

全 6 試合を観察した結果 3 つの傾向が示された。

- ①ペナルティエリア幅 40 メートルからの動き出しのプレーが多く、サイドからのプレーはほとんど見られなかった。
- ②自分が打ったシュート時、味方が打ったシュート時関係なしに、こぼれ球に対しての反応ができるポジションをとれている為、得点に多く関わる事ができている。
- ③フォワード選手がペナルティエリアから離れた中盤でのパス回しに参加した時に、攻撃のスイッチが入り、ゲームの組み立て以外にも攻撃の幅が広がりシュートに繋がっている。

## 4. 今後の課題

今回の調査対象は、6 試合と限定的であり、さらに多くの試合を分析する必要がある。調査対象の人数を増やすことにより、より研究が深まると考えられる。

## 引用参考文献

加藤大樹 (2015) サッカーW杯 2014 における再度アタッカーの特徴. 2014 年度びわこ成蹊スポーツ大学卒業論文抄録集, p185.